

みんなの知らない出産：連載①— グリーフケア —

満足いく「お見送り」 生きる力に

赤ちゃんの死に直面した親たちは、深い暗闇の中に沈む。

それでも、医療者や同じ経験をした仲間のグリーフケアがそっと背中を押し、前を向いて歩き出すこともできる。

編集部 深澤友紀 写真 植田真紗美

手術が難しいほどの重い心疾患を抱えながらも頑張って生まれてきた娘に、夫婦は、手術はせず、赤ちゃんらしく抱っこされて穏やかに過ごす人生を送りたいと願った。

2004年に神奈川県立こども医療センターで長女・ヒカルちゃんを出産した横浜市 of 古田忍さん(46)と夫が主治医の川滝元良医師(60)に「現・東北大学病院産婦人科」にそう伝えると、NICU(新生児集中治療室)に併設す

る個室で過ごす時間を設けてくれた。

代わる代わる娘を抱き、微笑みかけ、温かい時間が流れていく。そこへ、部屋に入ってきた川滝医師が、窓のカーテンを開けた。古田さんはその理由を、

娘が生後14時間で亡くなった後に知る。外に出られることはないヒカルちゃんに、空を見せてあげたかったのだ、と。さらに川滝医師は言った。

「人の命は、長さじゃない。密度です」その言葉を聞いて、古田さんは、た

くさんの愛をもらい、精一杯生きた娘を誇らしく思えた。

カーテンを開けて

空を見せてあげたい

この思い出を、古田さんは昨年12月に自費出版した『はるか空』に書いた。横浜市 of 竹縄晴美さん(50)は本を読んだとき、01年に亡くなった娘の美衣ちゃんが川滝医師の中で生き続けて

いると感じて、涙があふれた。

美衣ちゃんは21トリソミーによる合併症のため、同センターのNICUで4カ月半の命を終えた。亡くなる少し前に個室を初めて利用した竹縄さんは、主治医の一人だった川滝医師から、最後にしてあげたいことを聞かれ、「カーテンを開けて空を見せてあげたい」と答えた。NICUは窓が閉め切られ、美衣ちゃんはまだ一度も空を見たことがなかったからだ。

川滝医師は人工呼吸器や点滴の管がついて簡単には動かせない美衣ちゃんのベッドを窓際に移動し、カーテンを全開に。白い入道雲が広がる、真っ青な夏の空が見えた。竹縄さんは言う。「あのとき空を見せてあげられなかったら後悔しかなかった。今も川滝先生のおかげで、美衣が生まれてきてくれてよかった、と思えるんです」

川滝医師は当時を振り返って言う。「患者さんに教わったことを次につなげようと思ってやってきました。短くても、生まれてこられなくても、無駄な命だったとは思ってほしくない。治らない患者さんにこそ、向き合いたい」

赤ちゃんの死に直面した親たちは悲しみに暮れ、多くは途方に暮れてしまふ。一方で、赤ちゃんを過ごす時間には限りがある。死産や新生児死を経験した家族の「グリーフケア」を研究する聖路加国際大学看護学部の蛭田明子助教はこう説明する。



赤ちゃんが亡くなってから火葬までの限られた時間は、親になるための大切な時間でもある。このときに我が子とどう過ごすかが、その後の親たちの人生に影響する

「亡くなった赤ちゃんといふれあい、赤ちゃんのために今できることをする。」

このことが、子どもの存在を確かなものとし、後々両親が亡くなった赤ちゃんとのつながり、絆を感じるうえで心の支えとなることがあります」

我が子の死に、何ができるのか考える余裕もない親たちにとって、そばにいる医療者の果たす役割は大きい。

おなかにいる間に 思い出をいっばいっくる

1992年、日本で初めて小児専門病院に産科が設置された神奈川県立子ども医療センターは、おなかの子に病気が見つかった妊婦やリスクの高い出産を控える妊婦を多く受け入れている。母性病棟で働く助産師の舟山ゆかりさん(51)は先日、おなかの子が長く生きられない病気だと判明した妊婦にこう伝えた。

「おなかにいる間にいっばい思い出をつくっていらっしやい」

数週間後、その赤ちゃんは子宮内で亡くなり、入院した妊婦が舟山さんにお礼を言いに来た。助言を受けて遊園地に行った時、「赤ちゃんが今までにないぐらい元気に動いた」のだという。舟山さんには苦い経験がある。今から約30年前、助産師として就職した総合病院で初めて後期流産(死産)の分娩に立ち会ったとき、父親と祖父の意向に従って、赤ちゃんを母親に会わせないまま出棺した。「自分の無知で母親につらい思いをさせた」と後悔の念が消えない。

亡くなった我が子を抱っこしたり、写真を撮ったりするグリーフケアが広く知られるようになったのはそれから十数年後だ。それまでは、「思いが残るから」といった理由で母親を赤ちゃんに会わせないことが一般的だった。舟山さんはその後、同センターに移

り、親子の時間を大切に過ごしてもらうことが、悲しみを乗り越える力になるのだと気づき、トラブルなく生まれたい赤ちゃんと同じように接している。

神奈川県森本麻理さん(38)は10年に同センターで長男の和也くんを出産。和也くんは自発呼吸が難しく、翌日息を引き取った。

亡くなった子はすぐに火葬されてしまふものかと思っていたが、ほかの赤ちゃんと同じように母子同室で過ごし、病室へ来る看護師や助産師が皆、「かわいいね」「抱っこしてもいい?」と声をかけてくれる。森本さんは、「看護師さんたちは、この子が亡くなったことを知らないのだろうか」とさえ思った。看護師に勧められ、亡くなった後に沐浴し、写真もたくさん残した。

昨年、「グリーフケア・アドバイザ12級」の講習を受け、気づいた。「入院中にスタッフの方々のケアのおかげで和也くんをきちんと天国に送るこ

とができたからこそ、私は前を向けるようになったんだ」

9年前、次男の健太郎くんを心臓や肺の病気のため産後2時間余りで亡くした横浜市の森田弘恵さん(50)は、中学2年になる長男を育てながらPTA会長や民生委員などを引き受けてきた。「もしあの子が生きていたら、今頃病院通いで忙しかつた。健太郎がくれたたくさんの時間を無駄にせず、誰かのために役立てたいと思ったんです」

弔いというのは 残された人のもの

子どもの死を生きる力に変えられた理由は、満足いく弔いだ。

産後、退院までの1週間、病室で健太郎くんを過ごした。その間、ベビードレス、肌着、手袋、靴下、そして小さなウサギのマスコットを手縫いでこしらえた。退院のとき、看護師に「ここまでそろえた人はいないよ」と言われ、息子にできる限りのことをやってあげられたと思えた。森田さんは言う。「弔いというのは、残された人のものなんですよ」

十分なケアを受けられた母親もいるが、前回の連載に書いたように、死産後に赤ちゃんが金属トレイに載せられるなど、心に深い傷を負う対応をされた母親もいる。中には希望しても赤ちゃんに会わせてもらえない人もいる。

20年前に新生児死を経験し、聖路加国際大学「天使の保護者ルカの会」でグリーフカウンセリングを担当する石



した針さ使ん着て
くひ小天やに備
亡がった赤をに
もち縫一た服を
ど親と針ビっの空
母ひなにははけい

井慶子さんは言う。

「院内グリーンケアは、心ある医療者が行っているのが現状です。患者の悲痛をよく学んで充実したケアを行う病院とそうでない病院の格差は広がっており、傷つく母親は今もいます」

今回の連載で、赤ちゃんの死を経験した家族19組に話を聞いたが、皆が口にしたのは「退院後が一番つらかった」という言葉だ。産後は保健師らによる新生児訪問があるが、亡くなっていればこの訪問も受けられない。相談機関もなく、孤立する。そもそも産後はホルモンバランスが乱れ、うつになりやすい。赤ちゃんの死という大きな悲しみを抱える女性たちが、何のケアも受けられていないのが現状だ。

周囲からの「まだ若いんだから次があるよ」「泣いてばかりいたら天国の赤ちゃんが悲しむよ」といった「励まし」

でますます心を閉ざしていく。親にとつては、次の子も代わりにはならない。

家族との関係が壊れてしまうこともある。都内に住む女性(45)は、心拍確認後の流産を2度経験、3度目の妊娠はおなかの子が18トリソミーとわかり、安定期に入ってから後期流産(死産)した。遠方に住む実家の両親に「病氣もあつたし生まれてこないでよかった」と言われ、以来着信拒否にしている。

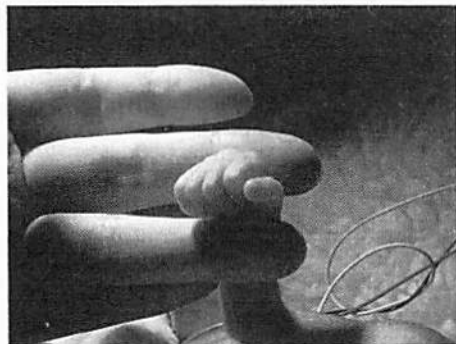
不妊治療を経て4度目の妊娠。今年2月に出産し、ようやく生きていた我が子に会えたが、親には伝えていない。「一緒に悲しんでもくれなかったし、死んだ子の供養もしてくれなかった両親に、もし今回の出産を喜ばれたら嫌悪感を抱いてしまうと思う」

天使ママたちが集まり 小さなベビー服を縫う

赤ちゃんの死を経験した夫婦にとつて、「納骨」もひとつの大きな出だ。いつまでも手元に置いておきたいと願う夫婦が多いが、親世代などは四十九日や一周忌などに納骨する「常識」を重視し、納骨を急かす場合が多い。

生後数時間で娘を亡くした神奈川県内に住む40代の女性は、お骨をそばに置いておきたいと思ったが、夫の両親が亡くなった娘のために墓を建てた。「娘を思う気持ちはお参りしている

命日に空っぽのお墓をお参りしている



747グラムで生まれた鶴飼さんの長男・希望くん。8日間の命だったが、カンガルーケアや沐浴をし、お七夜も祝い、母の腕の中で天国へ旅立った

と聞くとし訳なくて。早く納骨しなければならぬ気がして苦しかった」

こうした悩みも、同じ経験をした仲間であれば気兼ねなく相談できる。そのひとつが、神奈川県を拠点に活動する「天使のプティック」だ。

横浜市の鶴飼礼子さん(48)は結婚9年目で長男・希望くんを妊娠したが、妊娠31週の健診で心臓の病気が見つかった。出産予定の病院からNICUのある総合病院へ救急搬送され、翌日帝王切開で出産。18トリソミーによる多くの合併症があるとわかった。

NICUで面会した希望くん「ちゃんと産んであげられなくてごめんね」と泣き崩れた鶴飼さんに、担当の看護師は「のんちゃん、あなたたちならと思つて選んできてくれたんですよ」と言葉をかけてくれた。

希望くんは8日間生き切った。亡くなった後、その担当看護師が「天使のプティック」を紹介してくれた。

天使のプティックは、24週で生まれ

た次男・和人くんを1歳で亡くした代表の泉山典子さん(55)らが01年に活動を始めた。赤ちゃんを亡くした「天使ママ」たちが月に1度集まり、市販サイズより小さなベビー服を縫っている。鶴飼さんは、天使ママたちがこんなにもたくさんいるのだと知り、一人じゃないと思えた。もう子どもは産まないと考えていたが、天使ママが連れた子どもを見て、「また子どもを授かることもできるんだ」と勇気をもらい、娘に恵まれることができた。

1年前、妊娠19週で双子の娘を死産した都内に住む会社員、阿部颯美さん(32)は、医師から「天使のプティックのお洋服を着せませんか」と小さな手縫いのベビー服を手渡された。

市販のベビー服は50センチサイズがらが主流で、数百グラムで亡くなった赤ちゃんにとっては大きすぎて、より悲しみを深くする。天使のプティックの服は8センチからあり、阿部さんの娘たちにもぴったりだった。

「服を着た途端、赤ちゃんが人間らしくなつて、すごくうれしかった」

メッセージカードもついていた。そこには、こんなことが書かれていた。「あなたと同じような経験をした私たちが心を込めて縫いました。自分たちの天使に『このお洋服を着た子に会ったら、お友達になつて一緒に遊んであげてね』と語りかけています。一人じゃないですよ、お子さんもお母さんも」